

まどか☆マギカ _____ 慾望(悪魔)の終焉

ミニマニ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

円環の理に導かれるのを拒んだ明美ほむらは、鹿目まどかの持つ円環の理の一部をもぎとり、世界を自分の都合のいいように改変した。

——これは、改変された世界でほむらを待つ、最悪の結末の物語である。

目次

第1話 「記憶」

「あなたはこの世界が貴いと思う？欲望よりも秩序を大切にしている？」

「…それは、えっとその…。わ、わたしは貴いと思うよ？やっぱり自分勝手にルールを破るのって悪い事じゃないかな…」

「…そう、ならいずれあなたは…私の敵になるかもね。でも、構わない。それでも私は、あなたが幸せになれる世界を望むから」

望むから

望むから

望むから

まだだめよ

まだだめよ

”まだだめよ”

「何か、とっても大事な事を”忘れてる”気がする…」
放課後、親友である美樹さやかと共に下校する途中、唐突に鹿目まどかは眩いた。

そしてまどかはそのまま、立ち止まった。

「ん？どうしたのまどか。」

それを見かねたさやかが声をかける。

「…」

しかし、まどかはまるで人形のように一步も動かず、黙っている。

どうやら、さやかの声は届いていないみたいだ。

自分の世界に行ってしまうている。

「まどか？」

「はっ！」

さやかがもう一度声をかけると、まどかははっとした様子で戻ってきた。

「さ、さやかちゃん…」

「なーんか今日ずっと様子がおかしいね、何かあった？」

もし何か困ってるなら、このさやかちゃんに相談してみなさい！
あたしは頼りになるよー？」

さやかが言うように、この一日、まどかはずっと様子がおかしかった。

何を言われても曖昧に返事をし、授業もまったく聞いてなく、先生に怒られていた。

ずっと、何かを考えているようだった。

「あ、ああうん。ありがとう。でも大丈夫だよ。少しぼーっとしちゃっただけだから。」

「いやいや、全然そうには見えないって。」

もしかしてアレか？さやかちゃんじゃ頼りないってか？頼りないってか？そうなのか？

愛しのまどかにそんな扱いされたら、さやかちゃんショックだよー。」

しくしくと、さやかは大袈裟に泣くポーズを試してみた。

「…もう、からかわないでよー。」

本当に大丈夫だよ。

心配してくれてありがとう、さやかちゃん。」

まどかは、優しく微笑んだ。
だが、大丈夫というのは嘘だ。

まどかは、”ナニカの記憶”を思いだしそうになっていた。
絶対に忘れてはいけなかっただろう、ある記憶を。

でも、あと一歩のところで思い出せない。

しかし、これだけは何となく解る。

自分には、”大切な使命”があると。

その時だった。

隣にいるさやかが、聞こえるか聞こえないかくらいの声で”言った

”

「その内」思い出せる”よ、まどか。」

「——えっ？今何か言った？さやかちゃん。」

「いいや、何もー。」

あたしは、知っている。

この世界が、偽りの世界だって。

この世界は、悪魔によって創られたもの。

明美ほむらという悪魔によって——

あたしは、あの悪魔を許さない。

あたしは覚えている。

あの悪魔は、あたしの記憶を完璧に変えれたと思っ
ているようだけ
ど、なめないで欲しいな。

死んでも忘れてたまるものか。

まどかの想いを否定した、あいつを。

明美ほむら、あんたの創ったこのちんけな世界は、最近綻びを見せているよ。

まどかが神としての使命を思い出そうとしている。

まどかが完璧に思い出した時、あたしはあんたに言ってやるよ。

「ざまあみろ」ってね。

「……ちゃん」

「か……ちゃん」

「さやかちゃんっ！」

「……っ!?!」

まどかの出した大声で今度はさやかがビクンと反応し、戻ってきた。

「あ、あはは。

「どうやらあたしもみたいだね。」

「もう、散々私をからかったのに、さやかちゃんも同じじゃん。」

「ごめんごめん、まどかが移っちゃったんだよ多分。」

「困ったら私のせいにするの、良くないと思うなっ！」

まどかは怒った表情を見せると「さやかちゃんなんて知らないっ

！」と、さやかをその場に置いて歩き出した。

「あ、ごめんっ！待って！待って！」

先に行くまどかに謝罪の言葉をかけながら、さやかはまどかの元へ走った。

——そんな二人を、機嫌が悪そうに眺めている黒髪の少女がいたことは、まどかとさやかには知るよしもなかった。

「……まどかが幸せなら、私は……」

明美ほむらは、複雑な表情で、眩いた。